１学年通信

五所川原高校
令和５年１０月

「君は自分の将来をどう創るのか」

先日の進路講演会ではこの題名に「挑め！世界最強の敵、自分に」という副題を添えて、ベネッセコーポレーションの張先生からお話をいただきました。講演の中で心に響いたフレーズは多々あったのではないかと思いますが、私は**「今、生活リズムを整えなければ、今の生活リズムが3年生の高校総体終了まで続くことになる」**という部分が、多くの生徒に響いていて欲しいと思って聞いていました。事例では世界最高の敵が**「帰ったらすぐに冷蔵庫にむかう」**という習慣であった生徒が、その敵を倒す方法として**「帰ったら制服のまま30分机に向かう」**という新たな習慣を編み出し攻略していました。秀逸ですよね。このように、自分の生活リズムの中には大小の敵が潜んでいると思いますので、まずはその敵を具体的に見つけ出してください。そして見つけた敵を倒すために**オリジナルの方法を編み出してください。**きっと攻略できるはずです。

最優秀チーム決定!!

独自の切り口で作成した３分間のプレゼンで自分の好きな分野をアピールし合いました。

結果、見事優勝したのは 1201 泉谷　慶太郎くん、1204 下山　大智くん、1212 藤田　昊希くんの班が発表した「＃五高に隕石落としてみた」でした。投票した生徒からは「テーマが面白い」「隕石という発想がすばらしい」「確率を活用していて分かりやすい」などの感想が寄せられました。おめでとうございます。

後半の総探は「五所川原市」を掘り下げます。

「甲本ヒロト」と「さかなクン」の関係から多様性を考えてみる

魚類学者、タレント、イラストレーターの「さかなクン」とミュージシャン、シンガーソングライター、歌手の「甲本ヒロト」（敬称略）が仲良しだということを最近知りました。この対照的だと思っていた二人が仲良しだなんて、結構な衝撃を受けると同時になんだか嬉しくなりました。さかなクンはテレビに出始めのころは「魚好きの独特な人」として扱われていました。甲本ヒロトは「リンダリンダ」でメジャーデビューしたパンクロッカーで、破天荒な人という印象でした。もしもこの二人が昭和の時代にクラスメイトだとしたら。おそらく、互いの好きな分野を開示し合って仲良く話すことなど無かったのではないかと思うのです。片や客に唾を吐いてリンダリンダと激しく絶叫するボーカル、片やお魚のことをギョギョギョと熱っぽく語るマニアですから。

高校時代はまだ社会的に何者でもなく、自分のポジションを模索している時ですから、承認欲求が強く、他者の価値観を認めるよりも、自分の価値観を認めさせようとする場合が多いように思います。そのような時期であれば、彼らは出会っていても合流することはできなかったでしょう。自分とは違う価値観を認め、混じり合うことの良さを知った今だからこそ、このコラボは実現したのだと思います。他者の価値観を尊重することで多くの出会いが生まれます。皆さんが多くの出会いを通して成長することを期待しています。

「コミュニケーション能力とは何だろう」

3年生は本格的な受験シーズンに突入しました。皆さんの先輩方は先週末から総合型選抜の試験を受けるために県内外の大学へ向かっています。総合型選抜ではほとんどの場合面接が課されるため、3年生が面接練習をしている姿を見たことのある人もいるのではないでしょうか。面接練習において自己 PR をしてもらうと「私はコミュニケーション能力高く・・・」的なアピールをする生徒が多くいます。このアピール自体に問題はないのですが、そう言う生徒に対して「コミュニケーション能力とは何だろうか」「**なぜ大学や企業はコミュニケーション能力を重視するのだろうか**」と話を向けると、なんだかピンとこない回答が返ってきます。**このことについて皆さんならどう回答しますか**。大学や企業が求めているコミュニケーション能力とは**簡単に言うと「見知らぬ人や仲の良くない人と建設的に意見交換でき、良い仕事ができる能力」**ということになります。知っている人や仲の良い人とお話ができることとは少し違います。ではなぜこのような能力が必要なのでしょうか。以前、ある外資系企業（高学歴の大学生が第一希望にするような企業）の採用担当者が書いた本を読んだときに、なるほどなぁと思ったことがあるので少し紹介します。

それは、ある課題を解決するためのプロジェクトチームを結成する際にどのような考え方でチームをつくるのかという話でした。その課題を解決するためには「専門分野 A」「専門分野 B」「専門分野 C」の知識や技能が必要で、次の3つのタイプの人材がいるという設定です。タイプ①「A120点、B60点、C10点」、タイプ②「A60点、B70点、C50点」、タイプ③「A80点、B80点、C80点」。どのタイプの人材を集めてチームをつくりますか？というような問いかけでした。皆さんも少し考えてみてください。タイプ①は A の能力は抜群ですが、C の能力を考えると人物的にもどこか大きな欠点がありそうです。タイプ②は全体的に能力不足。よって、タイプ③が優秀な人材となり、タイプ③のような人材を数名集めてチームを作るのが日本では一般的だそうです。しかし、このチームには弱点があって、平均80点の課題（前例があるような課題）までは解決できても、平均100点だったり120点の課題（これまでに経験のない未知の課題）は解決できないのだそうです。では、そのような課題に対応できるチームをどうつくるのかというと、タイプ①のような一つの分野に特化した人材を分野 B と C に特化した人材も集めて3人でチームを組ませるのだそうです。そうすることで理論上平均100点以上の課題まで解決できるチームになるらしいのですが、このチームにも大きな弱点があって、このタイプの人材は個性が強すぎて他の人と組むことが苦手な場合が多く、課題を解決する前にチーム内でもめ事が起こってしまい結局課題が解決できないということが起こるようなのです。そこで、この有能で個性的なメンバーを上手にまとめるために、コミュニケーションの達人をマネージャーとしてチーム内に一人配置することで、未知の課題まで解決できるチームをつくるのだそうです。

皆さんはこの事例を読んで何を考えましたか。自分がある分野に特化したスペシャルな人材になった時、緩衝材役のマネージャーがいなくても超個性的なチームメイトと協働できますか？または、そのような人たちをまとめるマネージャー役ができますか？自分の考えでは普通絶対にしない行動や発言をするような人と数ヶ月から長ければ数年間、力を合わせて仕事ができますか？こういった場で発揮できる力が本当のコミュニケーション能力であり、大学や企業が求める能力だと思います。

先日の HR 活動では他のクラスの人々と交流しました。今まで一度も話したことのない人と交流すると同じ学校・同じ学年という共通点があっても、なかなかのストレスを感じたのではないでしょうか。これからも、目的を達成するために他者と関わる練習を色々と企画しますので、本当のコミュニケーション能力を身につけるため、前向きに挑戦して欲しいと思っています。